レミリアクソエッチ

自室の中央、豪奢なベッドの上に、レミリアは腰掛けている。室内は混んでおり、両手を伸ばすことすら難しい状態だった。館中のホフゴブリンが集まっているのだ。主人の部屋だけあって広々としているが、何十人と収めるのは流石に無理がある。

「いつも思うけど、あんたたち、本っ当に臭いわね」

彼らのような醜い連中が肩をぶつけあいながら突っ立っている様には、なかなかに見苦しいものがある。しかも、ホフゴブリンという種族は衛生観念に乏しく、ひどく臭う。室内には畜舎じみた臭気が満ちていた。

控えめにいって、ひどく不快な状況だ。そんな中にありながら、レミリアはまるで不快さを感じていないかのような笑みを浮かべていた。その瞳は、部屋の隅の大時計を見つめている。あと少しで、心待ちにしていた一日が訪れるのだ。そのわくわくは、多少の不愉快を打ち消して余るものだった。ホフゴブリンも、それは同じらしかった。じっとしてこそいるが、どことなく浮足立っている。しかし彼らの瞳は、レミリアが浮かべているものとはまた異なった、ぎらついたものを宿していた。

「咲夜」

「ここに」

虚空に呼びかけると、懐刀の従者が、何もないところから現れる。瀟洒だ完璧だと

賞賛される彼女といえども、室内の醜悪な光景には眉を小さく動かした。
「わかってると思うけど、いつも通り、一日暇をあげるわ。外に出てらっしゃい(戻ってきちゃダメよ)」
「……仰せのままに」
それは遠回しな厄介払いだった。狗と揶揄されることもある彼女が、主人の命令に逆らうはずもない。彼女は何も言わなかった。しかしその顔は、明らかな憂いの色を帯びていた。これから主人が何をするのかということ、それについての自分の諫言が一切受け入れられないことを、咲夜は知っている。憂いは、そのことに対してのものだった。
――ぼぉおおおおおん。
咲夜がいなくなったと同時に、大時計が鐘の音を響かせる。同じ音が三度鳴った。新たな一日が来たのだ。彼女のみならず、あらゆる悪魔にとって特別な一日が。
「ああ！　安息日よ、安息日が来たわ、待ちに待った」
それは殉教者のみならず、彼女のような吸血鬼にとっても祝うべき日だった。あの忌々しい造物主が、自分から休みをとってくれるのだ。好き放題するのに、これほど適した日もない。
「お前たち、悪魔のための一日がやって来たわよ」

にやりと笑い、ホフゴブリンを見回す。どいつもこいつも、ひどく粘ついたものを瞳のうちで燃えさせている。今回も、期待ができそうだ。

「憎き造物主やら救世主やらが休んでいる今こそ、我々悪魔が力を増すときよ。さあ、私に子を宿させなさい。この世の悪魔を増やすわよ、我が血を引く優秀な悪魔をね」

口から吐き出されたのは、耳を疑うような言葉だった。けれども、彼女は決して、冗談を言っているわけでも、錯乱したわけでもなかった。

紅魔館に最近出来たルール。それはひどくシンプルなものだった。ホフゴブリンは、安息日に、レミリア・スカーレットと乱交（セックス）すること。目的は、彼女が今まさに言った通りだ。悪魔を増やすのだ。彼女自身が、子を成すことで。

悪魔の交わりというのは存外に適当なもので、相手が平たく悪魔であれば、十分に子を成せる。別に同じ吸血鬼である必要はないのだ。彼らは相手として最適だった。弱い種族であるゆえか、その種には早産と多産の性質がある。産めよ増やせよに丁度良かった。でなければ、こんな連中など雇ってはいなかっただろう。彼らときたら、どいつもこいつも禿頭で、脂の浮いた団子鼻、木耳のような捻くれた耳に無愛想な唇、肥えた胸に腹に胴長短足の偏平足で、衣服は汚らしいぼろぼろで腰布一枚。見ていて愉快な外見ではない。その上性格も粗雑で下品、忠義心にも薄いときていた。しかし、

そういう外見上のデメリットは、悪魔の勢力を強めるという崇高な理念の前に、無視されていた。種が優秀でさえあれば、他のところはどうだっていい。
そうやって、もう何体眷属を増やしたか。十を越えてからは面倒になってやめたが、もっと増やさなくては。なにせあの忌々しい聖職者どもは、未だに減っていないから。
咲夜がこの宴を理解できないのも当然だ。彼女は、人間なのだから。
「そうそう、もちろん無礼講よ？」
付け足した。言われるまでもないと、ホフゴブリンどもは表情で語っていた。種をつけてくれと自ら懇願する女に対し、下衆な彼らが礼儀など持とうはずもなかった。
「へへ、一番乗りは俺だ」
押し合いへし合いを制し、一体のゴブリンが前に進み出る。彼はこちらの襟元を、皺が寄るほど強く握った。普段ならば触れることすら禁じているが、今は無礼講だ。彼女はむしろ、挑発してみせる。
「あら、脱がせてくれるのかしら？　エスコートなんて、あなたにできるのかしら」
「脱がす？　エスコートォ？　気取んなよ、ンなことしなくても、これで足りらぁ！」
彼はそのまま、生地を思い切り引き裂いた。びイイっと、最上級のシルク地が無残に破られる。その下から、人を脅かす恐怖の象徴とは思えないような白い肌が覗いた。

外見年齢にふさわしい、柔らかな肌だ。
淑女、まして主に対して、許される行いではない。肉塊（ハンバーグ）にされてもおかしくない暴挙だ。だが彼女は平然としていた。無礼講なのだからと。そして怒るよりもむしろ、喜んでいるような表情すら浮かべてみせた。
「犬っころみたいにがっつくのね。いいことだわ」
頬は紅味を増していた。これからすることへの期待が、彼女を昂ぶらせているのだ。
へっ、と、ゴブリン達は笑い捨てる。
「犬みたいに、ねェ。がっつくに決まってるじゃねぇですか、なんせ二十四時間しかねぇんだ、溜まりに溜まった鬱憤とザーメン、吐き出せるのはよォ」
この宴は、あくまで安息日の間にだけ行われるものだ。中止はないが、延長もない。だからこそ、彼らは今日という日を最大限に楽しもうとしているようだった。娯楽の少ない生活におけるストレスを、彼女にぶつけようというのだ。
「あはっ」
「おら、動いてんじゃねぇぞ」
彼らに忠義のちの字もない。下衆さもここまで剥き出しになるとかえって心地よい。
彼の言葉に同調するように、周囲のゴブリン達はベッドに乗りかかり、レミリアを

抑えつける。多くの手が彼女に群がり、丁寧に仕立てあげられた衣装を乱暴に剥ぐ。良家の箱入り娘に襲いかかる悪漢といった風情だった。もっとも、そんな娘は、今の彼女が見せているような淫らな表情など、決して浮かべはしないだろうが。

「あっ、ちょっと」

「ちょっと、だとよ。なァに今さら気取ってんだか」

下着に手がかけられ、身を捩るが、あっさりと封じられる。とはいえ、レミリアも本気で抵抗しようとは思っていない。今のは場を盛り上げるためのポーズだ。彼女に見せつけるように、彼らはドロワーズを下ろしていく。

「相変わらず綺麗なマンコしてやがんなァ、え？　へへへ、ここにいる全員のチンポ、両手じゃ足りねぇくらい咥え込んだくせによォ？」

両膝を、強引に割り開かれる。手で隠すことも当然許されず、女として最も重要な部分が、無数の視線のもとに晒される。そこは、柔らかな産毛をたたえた春の丘に、溝を一筋すう、と引いたような、素朴なものだった。外見年齢相応といったところで、少なくとも大人の女性のそれのような爛熟したものは備えていない――だがそこは、今の言葉の通り、ホフゴブリンどもの肉棒（ペニス）を何十回と咥え込んできた。数えきれないほど使われ、種を注がれ、孕んでは産んだ、娼婦顔負けの貪欲な雌穴だったのだ。

「あァー？　なんだ、もう濡らしてんのかよ。早すぎだろ」
「大方、これからチンポぶっ込まれることでも想像したんだろ、大したお嬢様だぜ」
へらへらと笑いながら、彼らは言いたい放題なことを口にする。図星だった。お前の浅ましい本性など見透かしているぞ、という視線が、こちらに向けられていた。
「平たい胸だなァしかし。揉んでも揉んでも膨らみゃしねぇ。見てて可哀想になってくるってもんだぜ、触りがいがねぇんだよ、触りがいがよォ」
「クリもビンビンにおっ勃ててよォ、ヤる気マンマンじゃねぇか」
「あはッ、ん、あ」
角ばった手が、無造作に、無遠慮に、当然のように、何ひとつ纏っていない彼女の身体に触れる。ある者の手は白磁の平椀を伏せたような乳房を揉みしだき、もう一人は秘裂の端で膨らみつつあった肉豆を指先で転がしていく。
技巧もなにもない、己が満足できれば良いという手つきだ。相手の快楽のことなど全く考えていない自分勝手な愛撫だったが、しかしレミリアは快感を覚える。こんな下衆な欲望の捌け口にされるなんて、という屈辱が、興奮を煽っていた。
「前から思ってたが、でっけェクリだなァ、ええ？　毎晩オナってなくちゃ、こんな風にゃならねぇ。どうなんです？　お嬢様よォ、言ってみてくださいよォ」

慇懃無礼、ですらなかった。形だけはぎりぎり敬語といえなくもない形を保ってはいたが、そこに敬意など存在していない。むしろ馬鹿にしているようですらあった。それでも、レミリアは咎めない。無礼講とは言ってあるし、こういうのも一興だ。
「そうね、っ、ン、毎晩、指で虐めてあげてるわ。火照りをおさめるためにね」
「オカズは？」
「直前の、安息日でのことね」
「はっ！　男にブチ輪姦（まわ）されてるのがそんなにイイってか。大したお嬢様だねェ」
「くくっ、そうね。何度も何度も貫かれて、種を植えられて……。あんたたちを雇うまでは知らなかったことだけど、それって本当に気持ち良いことなのよ？　女として生まれた意味を、身をもって実感できるのだもの。思い返すだけで、あはっ、身体が、熱くなるのも、当然ってものでしょ？」
　小汚い指に嬲られながら、気の狂ったような言葉を並べる。いたって正気だった。本気で、孕みたいと思っているのだ。
「んっ、……さあさあ、もっと頑張りなさい？　そんな愛撫じゃ、自分でしたほうが気持ちいいくらいよ？」
「へーェ、そう、です、かぁッと」

「あはぁッ！」
身体がのけぞる。充血しぷっくりと膨らんでいた肉豆を、無骨な指先がピンッ、と弾いたのだ。痛みと一体の快楽が、電撃のように身体を駆け抜けていった。
「おーう、お前ら、我らがお嬢様ァもっと激しいのがお好みなんだとよ。へ、大した好きモノだな。ヤッてやろうぜ」
「おうおう、しゃァねぇなあ」
「ええ、そうよ、お前たちの薄汚い性欲、私にぶつけンッ！　ぁは、なさいッ、ん」
「喘ぎながら言われても、威厳もへったくれもねぇな」
角ばった手がさらに伸びてくる。白い肌のあらゆるところを、手垢でも擦り込もうというかのように撫で回す。湿り気を帯びた雌穴に、指が入り込んでくる。襞を乱雑にめくっていく。女の秘部を弄れること自体に陶酔している手つきだ。びりびりした刺激に、彼女は鼻がかった声を上げる。雄棒を突き入れられてズゴズゴと前後されるあの悦びに比べればまだまだ不足だが、これはこれで悪くないのだ。
「おっと、乳首も勃ってきてんな？　こんな壁みてーな乳しといて、一丁前によォ」
「んんッ……！」
充血し始めた二つの突起を、人差指と親指が挟み込み、引っ張るように抓り上げる。

じわぁ、と、体奥向けて甘く広がっていくような快感が、鈍い痛みとともに訪れる。その先端から、薄甘い、母の象徴ともいえる液体がじわりと滲み出る。
「けけ、母乳出てんじゃねぇか、いーのかよ、ガキに飲ますもん垂れ流してよぉ」
彼女のような体格の少女がそれを流すのは、端的にいって異様だ。それは、見る者に違和感と背徳感からなる興奮をもたらす。当然、彼らに対しても。
「んッ、は、そう思うなら、無駄にしないでもらえるかしら？」
「へいへい、まぁ、しゃぶりがいのない乳だがなァ」
無駄にするなというのは、揉むのをやめろという意味ではない。彼らもそれは理解しているらしかった。
白い汁をとろとろと流す突起に、醜い顔が張り付いた。雪原ほどにも白い肌の中で唯一色をもった尖りに、分厚い唇がしゃぶりつく。授乳にも似た光景だが、明らかに異なる。赤子は欲望丸出しの目をギラつかせたりはしないし、マーキングしてやるといわんばかりに乳房を舐り回しもしない。
「あ、は、ぁんっ……」
母として子に与えるべき液体が、吸いだされていく。そのたび、幸福感に似た快感が広がっていく。ざまあみろと、心中で造物主に中指をたてる。授乳とは本来、母が

まだ歯も生え揃わない子のために行う、慈愛に満ちた神聖な営みだ。それをこんな、欲にまみれた形で行っている。冒涜だ。それでいい。悪魔は神に喧嘩を売るものだ。
「ひッ、ひひ、おおおお嬢様、キッ、キス、キスしましょキス、ひ、ひっ」
「ええ、いいわよ。ほら、おいでなさいな」
「ひひひィ！　いっ、いただきまぁす、ふぢュッ、ぢゅる、んぐふぅぅ」
豚だ、と、一目見て思った。それも、気忙しく鼻息を繰り返す、気の狂った豚だ。そんな輩の要求を、レミリアは快く受け入れる。彼とて貴重な子種の提供者だ。何かをもらおうと思ったら、金なり行為なり、相応の代償が必要なのは当然のこと。男が気持ちよく種を放てるように奉仕するのは、女の仕事のうちの一つだ。
「ふグゥ、ンフーッ、ぢゅぶる、むぢゅうう、ングフフッ」
「んく、んむ、ふっ、んぅ、ん」
肥り過ぎたナマコのような舌が、口の中で無茶苦茶に動き回る。接吻というより、口内を冒険しているかのような、無邪気、悪くいえば自分本位な動きだ。歯茎、口壁、唇、あらゆるところを彼の舌が行き来する。彼女も合わせて舌を動かす。夏場のドブのような臭いがする。彼の口臭だ。吐き気を催すそれに、しかし彼女は恍惚を覚えた。
「へ、目ェイッちまってんぜこのアマ」

「豚とキスすんのがサイコーってか？　とんでもねぇな。……しっかし、そいつだけ相手されんのも癪だな、よっしゃ、すぐにこっちもイかせてやるよォ」
「ンふぅウッ！」
腰が跳ねる。熱烈な接吻を尻目に、彼らは彼らで彼女を嬲るつもりのようだった。膣に入り込んでいた指が、さらに活発に動き始める。くちゃくちゃと、肉洞は早くもぬかるんだ音を立て始めている。
「こっちもだぜ、っへへへ」
手がもう一つ伸びる。人差し指の先が、彼女の秘裂よりさらに下、きゅっと窄まる菊穴に押し当てられる。本来なら排出するのが専門であるそこは、反射的に収縮して侵入者を拒まんとする。けれども、前の門から滴った蜜が潤滑油となっていたそこは、少し力を込められただけで、あっさりと陥落する。太い指が、肛内に侵入する。
「ケツ穴もずいぶんこなれたよなァ、指一本くらい余裕って感じじゃねぇか。まあ、当たり前か？　これより太くて硬ェもん、何本も何十本もブチ込まれてるもんなァ」
けけけけ、と、彼は品なく笑う。故なき中傷ではない。事実、彼女のそこは、出すためだけの場所ではなくなっていた――射精されるための場所になっていたのだ。
「ンふっ、んぅん……！」

ぬぷ、にゅぷと、指は彼女の背徳の門浅くを苛める。排泄のそれに似た快感が甘く広がる。それは膣穴に与えられるびりびりとしたものと合わさり、彼女を悶えさせる。
こちらでも、幾度も彼らと交わってきた。肛交は禁忌とされる。だが、そのことを定めているのは、あのクソッタレな教えだ。そんなものクソ食らえだ。だからこそ、肛門で子をなせるはずもないというのに、彼女は肛交を受け入れていた――そうしている間に、肉体がその快楽を好むようになった。下半身を好き放題に弄られながら、彼女は身体を震わせる。
「じゅるッ、じゅるるるッ、ぐじゅ、ぢゅるるるるっ、ずぞぞぞぞォ」
唾液が吸い取られ、代わりに送り込まれる。粘つく、ヘドロのような悪臭つきの、最低の汚汁だ。そんなものを、上等な血液のワインであるかのように、香りと味とを楽しみつつ、彼女は嚥下していく。瞳は恍惚に蕩けている。吸血鬼の王、夜の王たるこの自分が、こんな下等な相手と――と考えると、たまらない。
「ぶッはァアア」
豚じみたホフゴブリンが、これまた豚じみた息を吐き散らしながら、たらこじみたその唇をようやく離した。粘液が糸のように唇の間を伝う。これが恋人同士ならまだロマンティックだったかもしれないが、相手がこれでは台無しだ。だからこそ、良い。

「あはぁ……」
わずかに肩を上下させながら、法悦の溜息をついた。自分は今、こんな連中に身を開いている。こんな、醜さを極めたような連中に。触れられる物理的気持ちよさとは別の、精神的な気持ちよさが、潮騒のように彼女の官能を刺激していた。
「やぁっと、口が空いたかよォ」
口交の余韻に浸る暇は与えられない。ベッドの上で、ゴブリンが立ち上がる。腰に巻いたぼろぼろの、何のものとも知れない汚れがこれでもかと染み付いた布切れを、マントのように払いのけた。その内で戒められ続けていたのだろう勃起した男根が、ぶるん！　と跳ね上がり、自己の存在を主張してみせた。
「へっへへ、あんたの好きなモンだぜェ、お嬢様よォ」
びく、びくと脈動するそれを片手で扱きながら、ゴブリンは近づいてくる。彼らの体格はレミリアと大差なく、したがって大柄とはいえない。だというのに、その一物は、身体に不釣合いなほどにたくましくそそり立っていた。臍に先端がつくほど長く、腕ほども太い。そんなものを、こともあろうに彼は主人の眼前に晒してみせた。
彼らはそれを、あんたの好きなモンと称した――その通りだった。
「あはっ……」

ろくに風呂すら入らない連中の一物だ。腰布の中で蒸れたそれは、むわぁぁあ、と、雄の臭気をまき散らしていた。鼻の曲がるような悪臭だった。だがその一方で、雌を容赦なく狂わせるものを含んでもいた。いわば、フェロモンだ。女を惹きつけ、理性を壊し、自ら股を開く雌へ作り変えるフェロモン。

あろうことか、彼女は鼻から息を吸い、自らそれを肺に取り込んでいく。己の中の女が、雌が刺激される。きゅうううぅ、と、腹の奥が切なく縮み上がるのがわかった。

「へっへ、今日のために一週間、洗わずにおいたチンポだ、たまんねぇだろ？　……おっと、なんだァ、もう聞こえちゃねぇってか？　だろうなァ！　雌豚がよぉ！」

「あっ、ハッ、あんッ、あは、あぁんッ、あぁぁあ」

彼女の白い手が、自らの股間に伸びる。とろとろに濡れそぼち解されていた雌穴に指を捩じ入れ、ぐちょぐちょと掻き回し始める。誇り高き吸血鬼というにはあまりに浅ましい行為だ。その様を鼻で笑いながら、彼はレミリアのふっくらとした柔らかな頬へ、一物を押し当ててぐにぐにと擦る。

「おいおい、自分のことばっか考えてんじゃねぇよ。こっちが触って気持ちよくしてやったんだからよォ、お返しするのが筋ってもんなんじゃねぇのかよぉ、あ？」

カリ首には、一週間のうちに溜められた薄白い滓が、びっしりとこびりついている。

それをこそぎ落とすかのように、彼は彼女の頬で己のモノを扱いている。
　女は顔が命、といわれる。これを正しいとするなら、自分が今されていることは、命を汚すことと同義だ――にも関わらず、彼女はそれが快いといわんばかりの表情を浮かべていた。
「そうね、その通りだわ。ごめんなさいね、気が利かなくって」
「全くだぜ。ちゃんとしてくれよ、使えねーお嬢サマがよぉ」
「分かったわ、ほら――」
　ぷっくりと膨れあがる赤黒い亀頭。エラは深く、女穴を抉るためにあるかのようだ。肉幹はびきびきと充血しており、ぐねぐねと、血管を蛇のように這い回らせている。ときおりびくびくと脈動する様は、これから突進せんとする闘牛を思い起こさせる。根本にぶら下がる二つの肉玉も、ぱんぱんに膨れ上がっていた。その中にたっぷりと詰まった欲望（スペルマ）が、一日かけて己のありとあらゆるところに吐き出されるのだと思うと、いてもたってもいられないような気持ちになる。
　それはまさに凶器だった。こんなものを見てしまったら、もうどうにもならない。ただでさえ駄目になっている頭が、輪をかけて駄目になってしまう――なった。
　あんぐりと、首筋から直に吸血するときでもしないほど大口をあける。そのまま、

彼の股座に反り立つ雄の象徴にかぶりついた。もちろん、歯はたてないように。
「んぐプッ――」
途端、彼女は軽く痙攣した。口内から全身へ、男の味・臭気が広がったのだ。舌が痺れるようなという表現があるが、これにぴったりであるように思えた。けれども、悪いものではなかった。むしろ、たまらなくよかった。腹の底、子をなすための室が、悦びに収縮するのを感じた。そこは主張し始める。この素晴らしいもので抉られたい、襞がめくれて戻らなくなるほど蹂躙して、雄々しい種をたっぷりとつけてほしい、と。
「ぢゅブッ、ぐぷ、ぐぽッ、んフ、ンッ、ぢゅる、ぢゅむゥウ」
恋人へのキスよりも熱心に、彼女はソレに奉仕していく。肉茎に唇で吸い付きつつ頭を前後させ、扱きあげていく。細長い舌で亀頭やエラを舐め回し、みっちりこびりついた恥垢をそぎ落としていく。そして代わりに、唾液をたっぷりとまぶしていく。
色街の女でも、そのような仕事は嫌がるだろう。誰だって、対価に似合わぬ労働は敬遠する。だが彼女は、嫌がるどころか眉を垂れ下げ、媚を売るような表情すら見せ、その行為に没頭していた。最低の雄の、ほんの一時の快楽のために使われている――思えば思うほど、自らを嫐っていた指の動きがさらに激しくなる。掻き回されるたび飛沫を上げ、上等なシーツをぐしゃぐしゃにしていく。

「くッ……おうおう、美ッ味そうにしゃぶりやがってよォ、チンポ狂いの淫乱がよ」
「ンむ、くむぅううっ」
「うぉ、おうッ」
馬鹿にした口調は、先ほどに比べ余裕のないものだった。口淫も、何度も経験した。経験は確かに、彼女の技術を磨きあげていた。ぐぷッ、ぐぽっと、空気混じりの音が響くたび、彼は並びの悪い歯の隙間から詰まったような声を漏らす。
官能にどろどろに溶けていた思考でも――だからこそ――罵倒の言葉は理解できた。けれども彼女は、怒りなどはしない。それどころかむしろ、奉仕をより熱心なものにしていく。もっと罵ってくれ、と言わんばかりに。チンポ狂いの淫乱――自らの価値を貶めるそのような言葉が、今は最大の賞賛だ。
「ぢゅるぅううううッ……」
「おッ、おっほ、ォオ、いいぜ、それ、おっ、オゥッ、吸いだされるーゥッ……」
褒められて気を悪くする奴はいない。彼女も同じだった。お返しだ、と、ペニスを咥え込めるだけ深く咥えこんで、蛭のように吸い付く。彼の腰がビクビクと震える。それが何を表すものか、彼女は知っている。知っているからこそ、次にどんな指示が飛んできても良いように、心の準備をしておく。

「お、おおぅッ、射精るぞ、射精すぞッ、口離せ、そのメス面にザーメンぶちまけて化粧してやるッ、オラッ」
「ぢゅむ――ぢゅぽっ」
今回は、顔か――絶頂する陰茎の脈動を口内で感じられないのは正直勿体無い気もするが、熱い滾りを顔面で受け止めるというのも、それはそれで悪くない。頭を引き、口内で愛でていたそれを解放する。ギリギリまで頬を窄めていたため、空気の抜けるような間抜けな音が響いた。
「よっしゃ、射精すぞ、おおおっ、その澄まし顔汚してやらァ、お、おぁああァッ」
「あはァッ」
（体験版はここまで）